

# 「みんなで描く、未来のまちづくり ～地域まちづくりビジョンシンポジウム～」

## 《概要》

日時：令和元年 11 月 23 日（土）13：30～15：45  
場所：コンパルホール 3 階「多目的ホール」

## ◆基調講演 「次の地域をつくる担い手たち」

講師：岡野 涼子氏（一般社団法人NINAU代表理事）

- ・現在、「一般社団法人 NINAU」と「株式会社 ENTO」の二つの会社を経営している。ただただ、日田を元気にしたい、街を元気にしたいという思いで今まで仕事をやってきた。
- ・20 年以上前、大学進学で初めて東京に出た時、毎日のようにたくさんの人で賑わう都会に驚くと同時に自分の育ってきたまちがどれだけキレイかが分かった。街を元気にするとはどういう事なのか、人が豊かに暮らしていくとはどういう事なのか、地域が持続していくにはどうすればいいのかと思いながら就職活動を行い、マスコミに就職した。制作部に配属され、県内 18 市町村の色々な地域に行き、色々な方と出会ったが、元気なまちには必ずキーパーソンとなる元気な人がいて、地域活性の要は「人」だと感じた。
- ・その後、若い人達の人材育成をやりたいと思い退職し、キャリアコンサルタントの資格を取得し、大分大学のキャリア支援室で 8 年間大学生の就職支援をした。一人一人には魅力と可能性があるにも関わらず、就職活動になると急に固まり、言いたいことも言えず、会社に求められることを言わなければならないということを目の当たりにした。社会との接点が少ないため、どうやって仕事を選んでいいのか分からない。自分が何をやりたいのかも分からず、本当に悩んでいる学生にたくさん会ってきた。
- ・その後、出口である就職だけではだめだと感じ、地域人材を育成する文部科学省のプロジェクトである「COC+」に応募し採用された。具体的には、学生が早い段階から地域と関わりながら自分の適正を見つけていく、地域社会に寄り添いながら一緒に発見していく、こうした点を授業の中に取り入れるよう工夫した。それにより、若い人が社会と早い段階で関わることにより、自分には何ができて何ができないのか、何が得意で何が不得意なのか、社会にこれからマッチするにはどうすればいいのかなど、たくさんの経験ができた。
- ・今、地域に必要なことは仕組みのリノベーションである。今あるルールは、人口増加を前提とした制度が多いため、過疎化の進展や地域力がなくなっている人口減少時代では、このルール自体が適していないと思う事がたくさんある。ルールをゼロから作ることは難しいため、少しだけ新しい価値を入れてリノベーションしてはと考えた。
- ・日田で行ったシンポジウムの中で、日田で働きたいし、大好きだけど日田には何も無いといった高校生の意見があった。何も無いと思っている地域には若者は残らない。そこで、「NPO法人 日田しごと学び舎」（日田市との 3 年間の共同事業）を設立した。そこでは、若い人を日田の会社に連れて行き、日田にはどんな会社があり、どんな仕事をしている人がいるのかを伝える取組を行った。ただ、その中で、高校生や若者にとって地域づくりは自分の将来とは関係なく別に情報はいらぬ。こちらから大切なことだよと言っても、今高校生は困っていないので求めているということが分かった。この 3 年間は、トライして失敗しての繰り返しであり、どれだけ継続するかという事がポイントだった。継続する中で徐々に企業からのニーズが高まり、高校生も集まり始めた。

- ・その後、3年の事業が終わり一般社団法人という形で会社にすることにした。それが NINAU という会社であり、地域を担う子どもたちを作りたい、未来を思い描く力を身につけてもらいたいという事で設立した。補助金のみで行う事業であれば持続できないため、仕組みのリノベーションという事で、行政から補助金が無くなってもやっていけるよう、企業からお金をもらってニーズに応えるスキームを作った。日田駅前ですぐは高校生のフリースペースとして活用されており、高校生が宿題をしたり、お菓子を食べに来たりする。高校生から利用料はもらわず、行政や企業からお金をもらい、事業ベースで回している。
- ・「しごと学び舎」の3年間がなければ企業ニーズは把握できなかったし、現在のパートナー企業30社との信頼関係もなく、また、学校との信頼関係が無ければ高校生を集めることもできなかった。自分にできることから始めた小さな活動が、現在の会社で行っている事業に繋がっている。
- ・仕組みのリノベーションとは社会起業だと思っている。その地域にどれだけ仕事や利益を生み出せる人材がいるかが大切だと思う。法人化や上場が目的ではなく、地域に少しでもいいのでお金を回すような仕組みがあるだけで事業は継続可能になっていく。
- ・日田は大分市のように多くの高校がなく、進学等で外に出て行かないといけな。その中で、地域ならではの形を作ろうとしており、自分が勉強していることがどのように社会に活かされるのか分かったほうが勉強にやる気が出るのではないか思い、建築・土木を学ぶ高校生と一緒に駅前にフラッグというフリースペースを作った。これからの働き方は大きく変わっていく。人材は取り合いではなく、シェアして共有する時代になり、働き方をデザインできる地域でないと生き残れなくなると思う。
- ・他の地域でもやっていただきたい事業で「おとな先生」という日田を担う人材育成事業（年会費を受け実施）がある。日田には小学校が18校、中学校が12校、高校が県立高校3校あるが、「おとな先生」（日田で働いている人なら誰でもなれる）という名前で現在100名ほどが登録され、学校で授業をしている。例えば、木によるバイオ発電で電気を作っているモリショーホールディングスという会社があり、日田の小中学校、公共施設はその会社で発電された電気が売電されて運営されている。こうした機会がなければ自分の地域で電気が作られていることや木から電気ができるということを知らないと思うので授業の中に取り入れている。
- ・それぞれの仕事かどのように結びついているかを知らなければ、職業選択やキャリア教育にはならないと思う。ほかの地域の学校でも先輩を呼ぶ取組は行われているが、私達の取組は、1、2、3学期に必ずおとな先生が入り、最後にその振り返りを全体でする。それを小学校4年生から中学校、高校合わせて9年間、必ずおとな先生により日田の仕事を知る時間を作った。9年間受ければ、かなり情報量は変わってくると思う。小学校でまず知り、中学校で体験し、高校で考えるという体系化されたキャリア教育をこれからも行っていきたい。
- ・その他にも、毎年2月に「僕らの未来会議」という高校生が自分達で企画運営をし、自分の将来について考える会議をしている。日田には県立3校、私立2校の高校があり、通常は県立と私立で同じ時間帯に授業をするという事はまずないが、先生方のご理解や日田市の協力のおかげで、平日の午後、日田市内全部の高校1年生を集めてこの取組が行われた。

大分大学時代にAPUの出口学長の講演を聞いて、本当に素晴らしいと思ったので、ゲストに出口学長をお招きすることとした。そして、実行委員の高校生には、この会議を「面倒くさいものから面白いものに変える」というミッションのみを与え実施した。

- 面白くするためにはどうすればいいかと高校生は自分達で考え始め、間に合わないからと自発的に集まるようになった。ちなみに市長に来ていただいたが、市長挨拶もなかった。高校生には挨拶をさせないといけないという感覚さえなく、幕が開いた時には皆同級生なので、ものすごく盛り上がり、自然と拍手が起こった。大人が何かをさせるのではなくて、子ども達がやりたい形を大人がどうやって整えていくか、それが地域の次の担い手を育成する一つの手段だと思い、現在も取り組んでいる。
- もう一つの株式会社 ENTO という会社では、日田駅前や広場の活用、駅舎の2階でカフェやゲストハウスのような事をしている。日田駅前で高校生と一緒にイベントをした際は、日田市の九州コクボさんにご協力いただき、オリジナルのかき氷を売った。参加した高校生は全員違う高校の生徒で、卒業生もこの日のために帰ってボランティアとして手伝ってくれた。こういった繋がりを継続していかなければならない。
- 中学生や高校生は、事前に準備した質問であれば質問できるが、突然だとなかなかできないという場面に遭遇してきた。それは今まで場数が無かっただけであり、やらせれば皆ができる。先程の未来会議でも、高校生に権限を持たせて実施した。もし大失敗した場合の責任は大人がとるので怖い、その怖さに責任を持つことも大人の役割だと思い、自由にやらせてみた。そういう事を体験させることがNINAUの役割だと思い、子ども達と関わっている。
- 最後に、今日は「次の地域を作る担い手たち」というテーマだが、地域にどれだけ小さいながらも仕事を生める人材、事業として回していける人材がいるかどうか重要であり、補助金をもらえなかったからできなかったというのは、本当の地域での活動ではない。もちろん、市と協働して進めることもあるが、最初のスタートは自分達でやってみることが大事だと思う。
- ENTO は自分で全てお金を出し、補助金や市からの支援は入っていない。進めていく中で協力が必要な場合は、新しい仕組みとして取り入れていけばいい。新しい仕組みを作る若い人材が増えてくれば地域は確実に変わってくる。



## ◆パネルディスカッション

テーマ 「これからのまちづくりについて」

コーディネーター 岡野 涼子氏（一般社団法人NINAU代表理事）

パネリスト 古田 裕樹氏（長濱神社氏子青年会会長）

三浦 貴博氏（JR鶴崎駅「駅かふえ」オーナー）

山下 麻由香氏（アンビシャス国際美容学校校長）

立川 雅和氏（ビズモンドジャパン合同会社代表職務執行役社長）

藪田 真緒氏（大分大学経済学部学生）

佐藤 樹一郎 大分市長

### ①テーマ

「現在地域において取り組まれていること、地域やまちづくりに対する想い等について」

（古田 裕樹氏）

地元に残る若者が少なく、若い世代が集まる場を作り、地元に残る人材を育てていきたいと考え、長濱神社の青年会を立ち上げた。祭りは地域密着型の行事で数少ない世代間交流の場であり、地域について学ぶ貴重な機会でもある。



（三浦 貴博氏）

鶴崎地区振興戦略協議会を立ち上げ、鶴崎駅の橋上駅舎化、駅から支所までを繋ぐペDESTリアンデッキの整備、商店街の商品や物産品を取扱う道の駅の設置、地域の催物を行うイベント広場の整備など壮大なプランを策定した。

（山下 麻由香氏）

高校生の大学進学率は増加傾向でうち県内進学率は24.7%、大分の大学生の県内就職率は32.2%となっており、若者の流失が止まらない。大分の職場を紹介するに留まらず大分で活躍する大人たちの生き方などを情報発信し、若者が自分達の生活を支えている人達ってかっこいいなと思えるようにしてほしい。



（立川 雅和氏）

野津原にななせダムと道の駅が完成し、たくさんの方に訪れていただけることを期待している。野津原は大分駅や別府、湯布院にも近く住みやすい場所である。観光や移住者の方など、たくさんの方で賑わうことが地域の活性化や振興に繋がるのでは。

（藪田 真緒氏）

これからの大分市に必要なものは、やはり若者の力だと思う。アイデアという「思考力」、フットワークの軽さを活かした「行動力」が重要ではないだろうか。例えば、魅力を発信する学生宣伝部を作ってはどうか。楽しそうなイベントにより地域に関心を持ち、自分がそれを発信する。自覚を持つことが、関心を持つことに繋がるのではないだろうか。



## ②テーマ

### 「市長とのフリートーク」

(立川 雅和氏)

移住者向けにどのような PR や活動をしているのか。

(大分市長)

県外で仕事をしてきた方々が戻ってきて、親元の近くや一緒に住む場合に支援している。大分県が移住コンシェルジュと連携しながら情報発信をしていることから、そういった情報発信について充実していきたい。



(薮田 真緒氏)

県外へ転出した方が、大分市へ戻ってきてもらう政策を積極的に行うことが大事ではないか。

(古田 裕樹氏)

担い手不足を痛感している。参加すれば楽しいと思ってもらえて続くのだが、その一歩がなかなか出ないという所で、どうしたら上手くこちら側に引き込めるか相談しながら活動している。

(大分市長)

お祭りが地域の活性化の核になっていると思う。県外の方もお祭りのために仕事を休んで戻ってきている。若い方が連携しながら、担い手が増えていくことが大事ではないかと考える。そして、このような文化をこれまで以上に大事にしていくことが重要ではないだろうか。

## ③テーマ

### 「本日のシンポジウムに参加しての感想」



(薮田 真緒氏)

チャンスを見逃さず発見できるように、アンテナを常に張っておく事が私達若者にできる第一歩ではないか。

(立川 雅和氏)

体験する事で興味が芽生えてくるということは大事な事ではないか。年齢に関係なく、中高年や高齢者の方であっても同じではないか。

(山下 麻由香氏)

将来に悩む若者も多い。出会った一人一人の人生と一緒に考えていけるようなお手伝いをしていきたい。

(三浦 貴博氏)

地域に興味を持ち、その思いをぶつけながら案を出し、否定を一切しないといったグループが出来上がっており、本当にいい意見交換ができています。こういった取組がもっと増えてほしい。

(古田 裕樹氏)

自分が思った事を形にしたいと思ったら、言葉に出してみる、もしくは資料を作って見てもらうといった、小さな一歩をはじめること、そこから発展していくのではないだろうか。

(大分市長)

将来に渡ってこういうアイデアがあって、こういう風にやっていきたいというのが無ければ実現しないし、アイデアがあれば進んでいくという事だと思う。

それぞれの色々な所で頑張っている人がいて、将来に向かって明るい未来が開けそうだという事を発信していくのがすごく大事な事ではないだろうか。そういうストーリーを発信していく事によって、活躍する自分の未来が描けると思う。そういう取組を、皆でそれぞれのところでやっていく事が大事だと思う。

